

皇位繼承の歴史（七）

高田 友

江戸初期の騒動

戦國期の關白に近衛前久あり。粗忽なる人柄にして、天下人に阿諛追従し、つひに秀吉に關白の座を奪はる。一男一女あり。信尹のふただと前子さきこなり。前子は後陽成天皇の中宮と成りて、後水尾天皇と二宮にのみやを生み奉る。信尹に男子なく、我が甥なる二宮を養子として、家督を繼がせしむ。これ、當代無双の美男と譽高き近衛信熙なれど、茲に鎌足以来の藤原氏嫡流の血脈途絶す。然りといへども、皇家の男系の流れを繼承したるに由りて、家格は却つて上り、皇別攝家と稱とよへらる。

後水尾帝は幕府の粗略なる御扱ひに御憤懣遣る方なく、退位の素志を持ち給へるが、一六二九年遂に皇女に讓位したまふ。すなはち秀忠女和子（東福門院）所生の興子内親王にして、後に明正天皇と諡號しがうあり。一六四三年、異母弟素鷲宮すがのみやに禪讓あらせらる。新帝は後光明天皇なり。

後光明天皇、文武の道に拔ん出たまふ。然れども、和魂は斥け、漢才にのみ優れたまひて、和歌を詠みたまふの儀は稀なりき。宮人密かに誘り奉りて、「當今たうぎんは敷島の道に通じたまはず」と申す。一日、父上皇、帝に告げてのたまはく、「汝なん、盍みそぞ三十一文字を學ばざる」と。翌朝、帝より院に卷物一卷獻上あり。院此を開きて、吃驚きつきやうあらせたまふ。卷物には、御製百首記されたり。一夕にして、作りたまへるなり。

一方、帝は武術を好みたまふ。京都所司代板倉重宗、常にこれを畏怖し、參内して奏するに、「帝の劍撃を修練したまふは、關東への聞え憚りあり。庶幾こひねがはくは御扣ひかへあらせたまへ。否しからずんばすなはち、則、主上を隱岐へ遷し參らせ、身共は腹かツさばいて責めを負ふの外なし」と。主上、呵か々と笑はせたまひ、「殊勝なる申し状なるかな。朕未だかつて武士の割腹を目の當たりにすることなかりき。今、用意萬端整へしむるがゆゑ、禁闕きんけつにて腹切るの様を見すべし」と。

板倉重宗、沈着伶俐を傳へらるる豪の者なれども、かかる敕諭を蒙つて、蒼惶せいけい身の置き處となく、這う這うの體ていにて罷り出でしとの由。

後光明帝、惜しむらくは弱冠越ゆること二歳にて崩御あり。英明にてあらせらるるが幕府の恐るる所となりて、毒を以て弑したてまつれりとの風評あり。

（平成三十年十一月二十八日受附）